

「官」から「民」へ



随 筆

山 本 幸 佳*

From National University to Private Company

Key Words : Croatia President Glass Dosimeter
Central Europe Joint Enterprise

はじめに

「官から民へ」という言葉は小泉政権時代にもてはやされた言葉である。何事においても非効率的でサービスも悪い国のやる仕事の中で、効率第一の民間会社でできることはそちらにまわそうという掛け声のもと、多数の事業が民間に移され、郵政3事業までも民営化されてしまった。その前に起こった銀行の統廃合により近所の小さな支店が消滅してしまい不便をかこっていた体験からは、我が家の3軒隣にある小さな郵便局までもがそのうちになくなってしまわないかという不安は消えない。

かつての国立大学も民営化までは行かなかったが、組織替えをして独立行政法人として再出発した。筆者は大阪大学を平成15年3月末に退官したので、国立大学法人大阪大学の職員としての経験はない。在任中に法人化準備のための書類作成のためにかなりの時間と労力を割いた記憶はあるが、幸か不幸か独法化後吹き荒れる嵐に身をさらすことなく大学を去ることになった。もっとも、このタイミングで退官したことが幸いだったのか不幸だったのかは、独法化を体験していないのでわからないが、聞こえてくるうわさでは集金能力のあるやり手の教授にとっては天国だという。マスコミの利用も重要なようだ。その反対に集金能力がなく、マスコミにも縁のない教授は針のむしろに座らされている状態なのだろう

と同情を禁じえない。大学からは定期的に名誉教授宛に近況報告の印刷物を送って頂いているが、それらを見るにつけ、はっきりと理由は説明できないが、我が母校であり長年勤務した大阪大学が何か全く別の大学になってしまったような感じがして一抹の寂しさを覚える。以前と比較して非常に華やかなイメージを受けるのであるが、裏をかえせば何となく浮ついた感否めない。生き残りをかけて、研究・教育以外のことに結構時間を割く必要があるように見受けられる。

民間会社へ

筆者は迫りくる独法化の大波を逃れるようにして退官し官から民に移った。と言っても最初しばらくは週2日程近畿大学で教鞭を取っていたので、時間的な余裕が生じた以外環境的には大きな変化はなかった。ドラスティックな変化が訪れたのは平成19年7月からで、この時点からそれまで顧問をしていた民間会社の研究所長に就任することになった。まさに筆者個人の官から民への移行である。具体的には、(株)千代田テクノ大洗研究所の所長となり、この年になって初めて単身赴任を経験することになった。もっとも、30年程前にジュネーブにあるCERN(欧州合同原子核研究機構)に客員研究員として赴任した時には家族が来るまで半年程単身赴任の経験はあるが、華やかな国際都市ジュネーブでの生活とのどかな大洗町でのそれとでは、同じ単身赴任でも環境面で雲泥の差がある。加えて齢を重ね経年変化著しい身体のことを考慮すると決して生易しい決断ではなかった。それでも敢えてオファーを受けたのはやはり研究所長の職に「やり甲斐」を感じたからである。

千代田テクノという会社の企業理念は「放射線の安全利用技術を基礎に人と地球の安心を創造する」



*Takayoshi YAMAMOTO

1939年9月生
大阪大学大学院工学研究科博士課程修了
(1968年)
現在、(株)千代田テクノ大洗研究所 所長
工学博士 放射線応用物理
大阪大学名誉教授
TEL : 029-266-3113
FAX : 029-264-9031
E-mail : yamamoto-ta@c-technol.co.jp

という高邁なもので、具体的には最先端医療機器の輸入販売や原子力発電所に対する放射線測定器や防護具の提供を行っているが、主業務は個人被爆線量測定サービスである。日本全国にある病院、放射線施設それに原子力発電所で働く人たちの安全を担保するために、個人被爆線量計を配布・回収して月々の被爆線量を測定し報告するサービスであるが、国内のシェアは千代田テクノルが6割を超している。この種の線量測定には通常積算型の固体線量計が用いられ、千代田テクノルが提供する蛍光ガラス線量計（RPL：Radio-Photo Luminescence）の他に熱刺激蛍光線量計（TSL：Thermally Stimulated Luminescence）や光刺激蛍光線量計（OSL：Optically Stimulated Luminescence）などが普及している。TSLは通称TLとも呼ばれている。この中で蛍光ガラス線量計のみが我が国独自に開発されたすぐれた技術であるにも拘わらず、PRの努力不足もあって諸外国への知名度が低くドイツのカールスルーエ研究所で採用された以外は皆無と言っても良い。このことは筆者が千代田テクノルの顧問時代から歯痒く思っていたことで、国産技術の普及のためにも、また勿論会社のためにも、まず蛍光ガラス線量計なるものの存在そのものを外国の研究者に知らせ、次いでそのすぐれた特性を実感してもらうことが大事であると考え、個人的な交友関係を頼って、その研究者のいる研究施設にガラス線量測定システム一式を無償貸与して実際に使用してもらいガラス線量計のサポーターを増やそうという戦略を立てた。

ルジャー・ボスコビッチ研究所

ヨーロッパ特に中央ヨーロッパの国々では個人被爆線量計として未だにフィルムバッジを使用している施設が多く、それらが徐々にTSLやOSLに移行しつつある現状なので、今ならガラス線量計の採用の可能性も充分にある。そこでまず白羽の矢を立てたのがクロアチアであった。何故クロアチアかというと、同国の国立ルジャー・ボスコビッチ研究所（RBI：Ruđer Bošković Institute）のマリア・ラノガイェッチ博士と筆者とは固体線量計の研究を通じて十数年来の知己であるため、趣旨を話して協力を依頼すると快く引き受けてくれることになった。そこで2年前にガラス素子と測定システム一式を送りデータを取ってもらうことになった。その後彼女達



写真1 哲学者ルジャー・ボスコビッチの像。
同研究所の庭にある。

のグループはガラス線量計を利用した実験結果を精力的に国際会議等に発表し論文にもまとめてくれているので、蛍光ガラス線量計のPRという目的は十分に達成されている。そのような活動も重要な要因の一つになったのかもわからないが、昨年フランス放射線防護庁（IRSN）の個人被爆線量測定システム一式の受注に成功した。原子力大国による蛍光ガラス線量計の採用であるから、その影響力は大きい。その後、欧米やアジア諸国から引き合いが来るようになり、グローバル企業としての第一歩を踏み出したと言っても良いであろう。

国際戦略

前述したように、単身赴任をおしてまで研究所長を引き受けた一番大きな動機はやはり「やり甲斐」があると感じたからである。まず研究所の若手研究員を大学院の力を借りて育成し学位取得を目指させること。学位は勿論結果であって、主目的はそこに至るまでの過程において最先端の技術と知識を修得させることにある。そして何年か後には博士号取得者が何人もいるような研究所の姿を思い描いている。そうやって初めて対外的に大学院や独立法人研究所などと対等な立場で共同研究を進めることが可能となるからである。

もう一つの所長としての重要な役割が国産技術の海外展開である。筆者は昨年まで6年間「固体線量計」国際組織委員会（ISSDO：International Solid State Dosimetry Organization）の委員に就いていた

関係で、幸い当該研究分野の知己が海外に多数存在する。それらの友人には機会あるごとにガラス線量計の特長を把握してもらおうべく努力をしているところである。さらに大洗研究所を舞台にして個人被爆線量計に関する国際ワークショップを千代田テクノルがスポンサーとなって開催し、アジアのみならず欧米からも関連する研究者を集めガラス線量計の宣伝に努めている。正確には第1回(2005)と第2回(2006)は「東アジア地区ワークショップ」と銘打って、主として東アジアの国々の人々を対象としていたが、第3回(2007)からはアジアと欧米を含めて約30名の外国人研究者を招待し「インターナショナル・ワークショップ」に衣替えをした。日本側の講演者・参加者を含めると総勢約100名の規模に膨れ上がった。海外からの招待者は皆見学时に、初めて見る蛍光ガラス線量計の全自動被爆線量測定システムに強く印象づけられていたようであった。

クロアチア大統領

研究所として次に目指しているのが海外研究施設とのガラス線量計に関連した共同研究である。クロアチアの国立ルジャー・ボスコビッチ研究所とは、昨年(2007)当社の細田社長と一緒に訪問した際に、同研究所のジニッチ所長と社長との間で正式に共同研究に関する協約が締結された。お互いに得意な分野の知識・情報を出し合っ放放射線の安全利用に関する研究を新しい分野に向けて展開して行くことで合意した。午前中に契約条項の話し合いを終えた後、ジニッチ所長招待の昼食会が首都ザグレブ郊外の山



写真2 共同研究の協約書に署名を終えて握手する
ジニッチ所長と細田社長

腹にある見晴らしの良いレストランで催された。自動車に分乗し途中の景色を楽しみながらレストランに到着すると、何やらものものしい雰囲気、周辺や入口の辺りに黒服にサングラスをかけたプロレスラーのような体格の男たちが立ちはだかっていた。驚いて従業員に何かと訊いてみると、クロアチアのメシッチ大統領が今から昼食を摂りに来られるとのことだった。クロアチアは治安もよく安定した国家であるが、もとを正せば旧ユーゴスラビアの一部であり、隣にはかの有名なボスニアヘルツゴビナが接していて、コソボとかセルビアといった日本から見れば物騒な国や地域も近いので、流れ弾に当たらないように気をつけなければならないなどと冗談を言いながら席についた。宴もたけなわになった頃、入口付近がザワザワしだしたなどと思ったら、大統領一行が到着した。我々と同じく庭にテントを張った一角のテーブルに10人程で座を占め食事が始まった。南側は山の斜面になっているとはいえ、野外のオープン・レストランで悠然と食事をしている大統領の姿からは安定なクロアチアそのものが感じられた。大統領一行が食事を終えて帰る時、我々はまだワイン片手に友好を深めていたが、驚いたことに大統領がツカツカと我々のテーブルに近づいて来た。これは予め研究所のラノガイェッチ博士が根回ししてくれていたためであった。ルジャー・ボスコビッチ研究所と共同研究を始めた日本企業の代表団であるとの触れ込みだったようで、細田社長とガッチリと握手を交わし今後の一層の協力関係の樹立を約した。ついでに研究所長として筆者も握手を交わす機会を得た。後日談になるが、去る3月4日に大統領が初来日された折に、東京の帝国ホテルで大統領主催のレセプションがあり、細田社長と一緒に招待されて再会を果たしてきた。会場は千人以上の人で溢れかえり、政治家や芸能人も多数いたようであるが、中でもデヴィ夫人の華やかさがひときわ目立っていた。これではとても大統領に近づけそうにないかなと遠くから眺めていたら、顔見知りのシュタンブク駐日クロアチア大使が手を挙げて近づいて来て、社長と筆者を大統領のそばまで大勢の人をかきわけて誘導してくれたため、再び握手を交わすことができた。半年以上前にザグレブ郊外のレストランで撮った大統領と筆者が握手をしている写真をプレゼントして来た。



写真3 クロアチアのメシッチ大統領と握手する筆者。
左側の二人は細田社長とラノガイェッチ博士。
ザグレブ郊外のレストランにて。

中央ヨーロッパ圏

ラノガイェッチ博士との縁でクロアチアの要人と顔見知りになる機会が多く、同国原子力安全庁のプラフ長官などは、昨年日本を訪れた際わざわざ千代田テクノルの大洗研究所まで訪ねてこられた。蛍光ガラス線量計の特長を説明し、実際に線量測定サービス業務を見学されて大いに興味を示され、このシステムを是非クロアチアにも導入したいとの意向であった。但し、長官の考えはザグレブに計測センターを置き、測定サービスは近隣の諸国を巻き込んで中央ヨーロッパ圏にまたがってやろうという大きな構想である。千代田側に勿論異論はなく、構想実現に向けて全面的に協力をする旨申し入れている。

帝国ホテルには白川駐クロアチア大使も出席され

ていた。クロアチアの日本大使館には池田前大使（現ITER 機構長）の頃から何度かお邪魔する機会があり、大使公邸の晩餐会にも細田社長やラノガイェッチ博士らとともに招待されたりもして、両大使にもこの中央ヨーロッパ圏構想をお話してご賛同頂き、白川現大使などはプラフ長官とも連絡を取り積極的に取り組んで頂いているようである。また、ラノガイェッチ博士も国際会議等の機会を利用して、ハンガリーやポーランドなどの要人と会い、この構想を説いてまわっておられるようなので、ひょっとすると実現は近いかもしれない。

おわりに

もともととはラノガイェッチ博士と筆者の個人的な知り合いに過ぎなかった関係が、筆者が千代田テクノルの縁を食むようになってから、千代田対ルジャー・ボスコビッチ研究所となり、さらには千代田対クロアチアから千代田対中央ヨーロッパへと拡大しそうな情勢になって来た。これも筆者が官から民へ移籍した効果が現れつつあるのではないかとひそかに自負しているところである。もっとも現実には、政官界にも強い人脈のある国際派の細田社長の強いサポートがあったためであることはいうまでもない。後は今育成中の若手研究所員が一人前の研究者になり、将来この事業にも参画し国際的に活躍してくれるようになれば、筆者の官から民への決断が果実を結ぶことになる。

